

◆ 奥田あやと囲碁体験 ◆

指導者も必読！ ゼロから分かる

入門 エッセンス セミナー



奥田 あや 三段

time 2

こんにちは。先月号に続いて、入門講座の第2回です。まずはその先月号のおさらいをしておきましょう。先月号を未読の方でも大丈夫、十分に追いつくことができるので、安心して読み進めていってくださいね。

また日本棋院ホームページ内でも、本コーナーに関しては、PDFで先月号の内容をダウンロードできるようにしてありますので（次ページ下段参照）、そちらも合わせてご覧になってください。

第1回のおさらい

これまで囲碁は「最も入門が難しいゲーム」と言われてきたのですが、決してそんなことはありません。5歳の私でも簡単に覚えることができたくらいですから。

ではなぜそんなことが言われてきたのかというと、それは囲碁の勝敗を決定するルールである――、

- ・ 囲った陣地の多い方が勝ち

という表現が漠然としていることで「陣地って何？」と二の足を踏む人が多かったのです。将棋のように「相手の王様を取れば勝ち」といった分かりやすい表現ができればいいのですが、囲碁の場合はこう表現するよりなく、ここが囲碁入門における最大のネックとなってきたわけです。

しかしこの「陣地とは何か」さえ理解していただければ、もう囲碁は打てるようになったも同然です。それ以外には、障害となるような難しさは存在しません。

というわけで、先月号では「陣地とは何か？」および「陣地の数え方」についてお話ししました。

ではその具体例ですが、まずは次ページの1図をご覧ください。

Profile おくだ あや

東京都出身。大淵盛人九段門下。平成16年入段。23年三段。東京本院所属。第27期女流本因坊戦挑戦者決定戦進出。第22期女流名人戦リーグ入り。第4回大和証券杯ネット囲碁レディース準優勝。

これは囲碁の対局が終了した形の一例です。右上と左下の黒石で囲ってある部分が黒の、左上と右下の白石で囲ってある部分が白の陣地です。

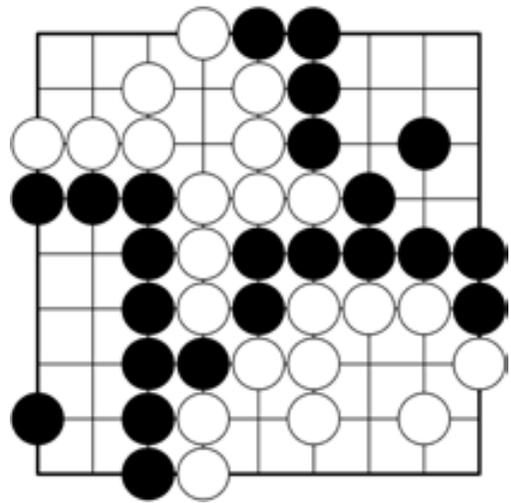
また陣地のことを「^じ地」と呼び、それに伴って、黒の陣地を「黒地」、白の陣地を「白地」と呼びます。そして黒地と白地の数を数えて、どちらがより多くの地を囲ったか？——これが囲碁の勝敗の決め方となります。

なお数えるのは、マスの数ではありません。線と線が交わる交点の数を数えます。盤の端も数えることをお忘れなく。また数える単位として「^{もく}目」という用語を使います。交点一つごとに「1目、2目……」と数えていくわけですね。

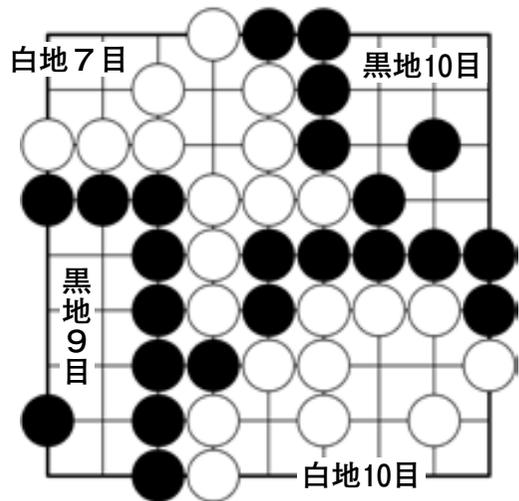
では改めて、1図の黒地と白地を数えてみてください。

その答えが2図です。右上の黒地が10目で左下の黒地は9目。左上の白地が7目で右下の白地が10目。従って合計は、黒地=19目、白地=17目となり、勝敗は「黒の2目勝ち」ということになります。

先月号では、ここまでお話ししました。



1図



2図

★ 編集室からのお知らせ ★

本コーナーでは、4月号から入門講座を解説しておりますが、今月号（5月号）以降よりご購入いただいた場合、内容が途中からになってしまいます。そこで本講座に限っては、幣院ホームページのトップ画面中段にごぞいます出版最新情報から「囲碁未来」誌のロゴをクリックいただき、そこから前号の記事をPDFにて確認できるようにしております。ぜひ新規ご購入者のみなさまにおかれましては、以下にまでアクセスいただければ幸いです。



トップ画面のロゴをクリック

URL http://www.nihonkiin.or.jp/publishing/2012/03/post_260.html



では、今月号の本題に入ります。

地の数え方と、それに伴う勝敗の決め方については、ご理解いただけたかと思えます。これで囲碁のルールの大半はマスターしていただいたことになるのですが、今月はそこに付随するもう一つのルールについてお話ししていきましょう。

石を取っても勝ちではない

囲碁とは「囲った地の大小」を競うゲームですが、地を囲い合っていく実戦の中では、碁石を取ったり取られたりという戦いが起こります。

この「碁石を取ったり取られたり」の具体的なテクニックについては追ってお話しますが、では、この取ったり取られたりした石は最終的にどうなるのか——今月号では、この点についてのお話をしようと思えます。つまり——

・なぜ石を取るのか？ 石を取るとどういう利点があるのか？

ということですね。従ってまずは、一番大切なことから指摘しておきましょう。

囲碁とは、石を取ったり取られたりする

ことのあるゲームですが、

・相手の石を取ったからといって、それが即、勝ちに結び付くわけではないということです。

相手の石をいくつ取っても、勝ちではありません。逆に石をいくつ取られても、負けではありません。

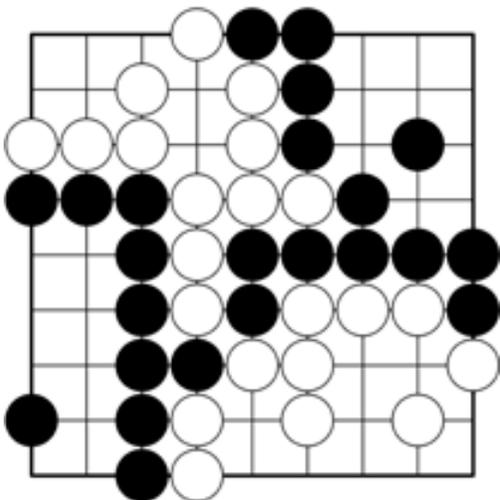
では、石を取ったり取られたりすることには、どういう意味があるのか——それをこれからお話しします。

アゲハマの活用法

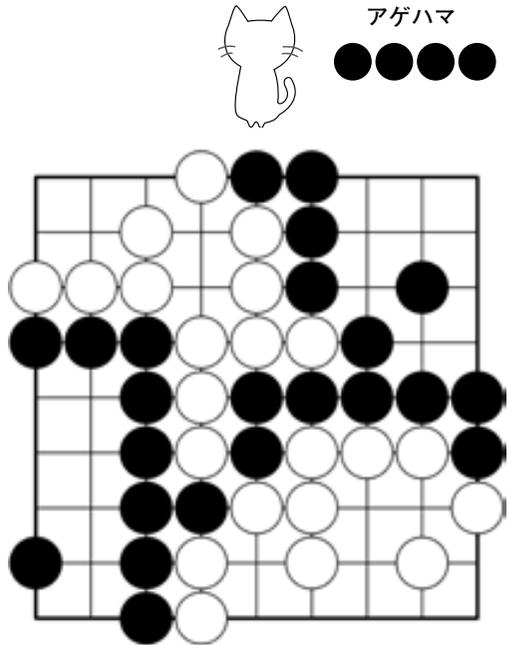
まずは前ページで地を数えた図を、もう一度**3図**として掲げます。この図が黒地19目vs白地17目のため「黒の2目勝ち」であることはすでに示したとおりです。

では続いて**4図**をご覧ください。

石の配置は3図とすべて同じですが、こ



3図



4図

のような結果になる過程で、黒は相手の白石を3個、白は相手の黒石を4個取ったと仮定しましょう。

この取った石をどう活用するのかが問題となってくるわけですが――、

取った石のことを、囲碁用語で「アゲハマ」と呼び、このアゲハマは最後に双方の地を数える時――、

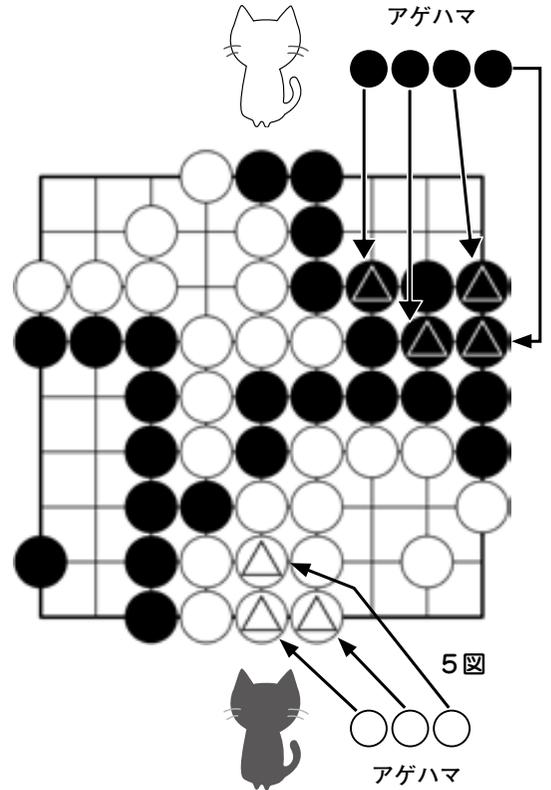
・相手の地を埋めることができる

のです。

つまり、相手の石を多く取っていればいるほど、最後に相手の地を多く埋めることができる、ということなのです。

実例で示しましょう。前ページの4図で黒が取ったアゲハマ（白石）が3個、白が取ったアゲハマ（黒石）が4個でした。このそれぞれのアゲハマで相手の陣地を埋めた図が5図となります。

埋める場所はどこでも構わないのですが、仮にこのように▲と△として埋めると、19目だった黒地は15目に、17目だった白地は14目になりました。従って、この碁の結果は、双方のアゲハマがゼロだった3図とは変化して「黒の1目勝ち」ということにな



るのです。

この理屈がお分かりいただけただけでしょうか？ 石を取ったり取られたりするこの意味は「最後に相手の地を埋める」ことにあるのです。

*** 九路盤セットと十三路盤セットのご紹介 ***

十九路盤のセットはお近くのおもちゃ屋さんや、小売店などで比較的簡単に購入できるが、九路盤や十三路盤セットとなると、店頭でみかけることは難しい。東京、大阪、名古屋ならば、日本棋院の東京本院、関西総本部、中部総本部があるのでぜひ一度足をお運びいただきたい。

遠方の方にご利用いただきたいのはインターネットを使った日本棋院オンライン囲碁ショップや、電話注文・FAX注文対応の通信販売である。

写真①の九路盤セット(¥1,470)は、裏は七路盤として、また写真②の十三路盤セット(¥5,250)は裏は九路盤としても使え、さらに携帯性も抜群でお値段も手ごろ。まさに囲碁の入門キットとしてはうってつけの人気商品だ。



①九路盤セット ¥1,470



②十三路盤セット ¥5,250

- 本院
千代田区五番町7-2
JR・地下鉄市ヶ谷駅より徒歩1分
- 八重洲囲碁センター
中央区八重洲1-7-20 八重洲口会館9F
(東京駅/八重洲地下街直通)
- 関西総本部
大阪市北区角田町1番12号
阪急ファイブアネックスビル6F
- 中部総本部
名古屋市中区榑木町1-19
- 日本棋院通信販売センター
TEL 03-3288-8788 (平日9:00~17:00)
FAX 03-5275-6844 (年中無休 24時間受付)
- 日本棋院オンライン囲碁ショップ
<http://www.rakuten.co.jp/nihonkiin/>



ここまでのお話をまとめましょう。

囲碁の対局において繰り返し「石を取ったり取られたり」ということが起きますが、取った石の数によって勝敗を決めるわけではありません。

あくまでも「囲った地の多さ」で勝敗を決定するのですが、最後に地を数える時に「取った石で相手の地を埋める」ことができるということです。

つまり、相手の石をたくさん取ったとしても、それ以上に相手の地が大きければ負けるわけで、逆に石をたくさん取られたとしても、それで埋めきれないほど大きな地を囲えば勝ちということなのです。

囲碁を覚えた直後は、どうしても「石を取る喜び」が大きいため、つつい石を取ることに夢中になってしまいがちです。石の取り方のテクニックを学ぶ意味で、それは決して悪いことではないのですが「最終的に地の多い方が勝ち」という目的だけは見失わないようにしてくださいね。石をどんなに多く取っても、地が足らなければ負け——このことを常に念頭に置いておけば、上達も早いこと間違いありません。

要は「地とアゲハマの足し算と引き算＝バランス」だということですね。この兼ね合いこそが、囲碁を打つ際の楽しみの一つでもあるのです。

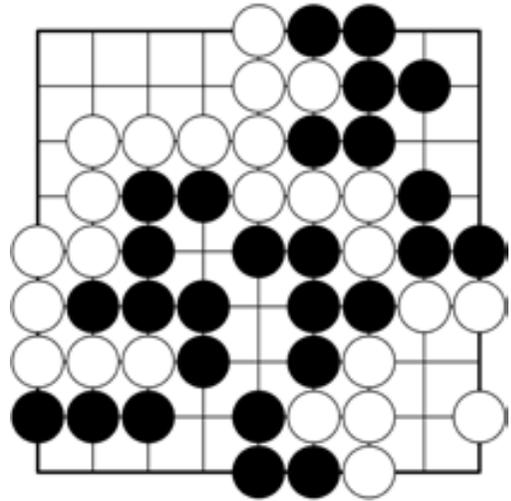
練習問題ふたつ

では、アゲハマを活用した地の計算方法に慣れていただきたいので、右の二つの問題に取り組んでみてください。

手順は今までと同じです。まずはアゲハマがないものとして双方の地を計算し、次にアゲハマで双方の地を埋め、その状態で改めて地を数えてみてください。



アゲハマ



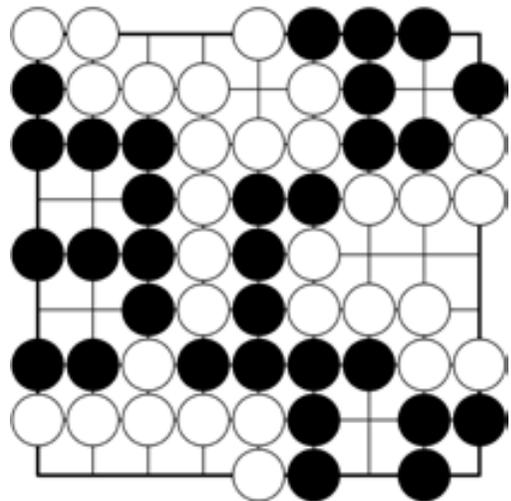
第1問



アゲハマ



アゲハマ



第2問



アゲハマ

アゲハマの数によっては 目数が逆転することも

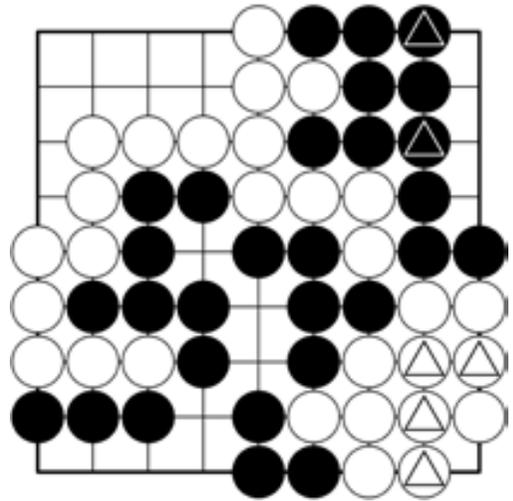
解答1 アゲハマがない状態では、黒地が14目で白地が15目です。しかしアゲハマで双方の地を埋めてみると、黒地が12目で白地11目となり「黒1目勝ち」という結果になりました。

盤上だけならリードしていても、アゲハマを加えると数字が入れ替わる——その典型的な例でした。

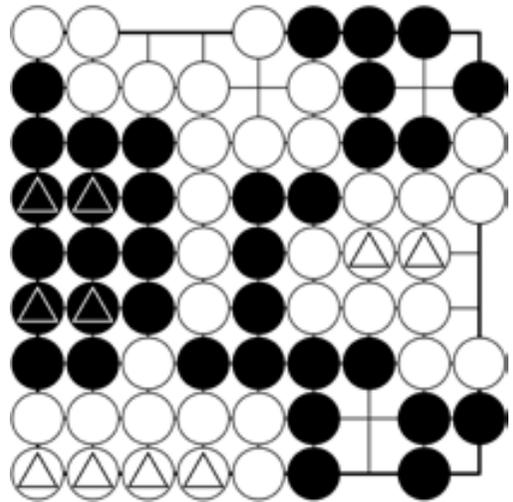
解答2 アゲハマなしの状態では、黒地が9目で白地が11目。そしてアゲハマで双方の地を埋めてみると、黒地が5目で白地も5目と同数になりました。

これは引き分けであり、囲碁用語で「ジゴ」と呼ぶということは、前回でもお話ししましたね。

なおアマチュアの方の中には「ジゴは白勝ち」と思っている方がおられるようですが、ジゴはあくまで引き分けです。大会などで引き分けが発生しては困る場合に便宜上「ジゴは白勝ち」と規定しているだけなので、お間違いのないように。



解答1



解答2

週に一度の…

5歳で祖父から囲碁を教わった私は、瞬く間にこのゲームの魅力に取りつかれました。1年少々で初段の手前くらいまで上達したので、いかにのめり込んだかが分かるというものです。

祖父は当然、大喜びでした。私が小学校に通うようになってからは、私が学校から帰ってくると祖父が碁盤を出して待ち構えていて「さあ、一局」が

日課になっていたほどです。

とはいえ私も、遊びたい盛りの小学生。毎日必ず囲碁では、友達と遊ぶことができません。いつしか「友達と遊びに行きたいのに…」という不満が溜まるようになってきました。

なので祖父が開催していた習字教室のある月曜日だけが、週に一度のお休みの日。その日だけは学校から帰ってくると、一目散に外へと飛び出して行ったのでした。

以上で、地の計算方法＝勝敗の決め方に関する説明は、すべて終わりました。囲碁がどんなゲームであるかについては、これでご理解いただけたかと思います。

では続いて、今回の文中で「追ってお話しする」と記した`石の取り方、について少しだけ触れておきましょう。

「ポン抜き」について

6図をご覧ください。

このような状態で黒1と打てば、△の白石を取ることができます。

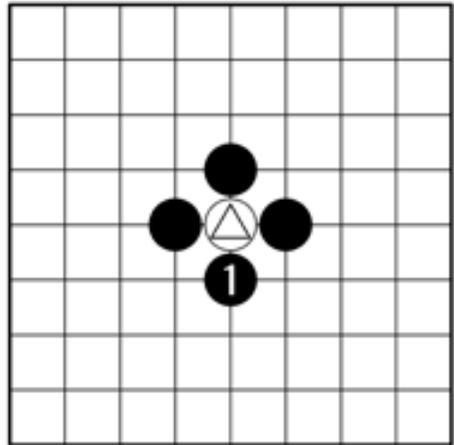
「取る」とはということかと言いますと、盤上から△を取り除いてしまえるということで、7図の状態になるということです。そして取った石は、碁石を入れてあるケース（碁笥と言います）のフタの中に入れてください。

そしてこのフタの中に入れた石が、今回お話しした「アゲハマ」に他なりません。

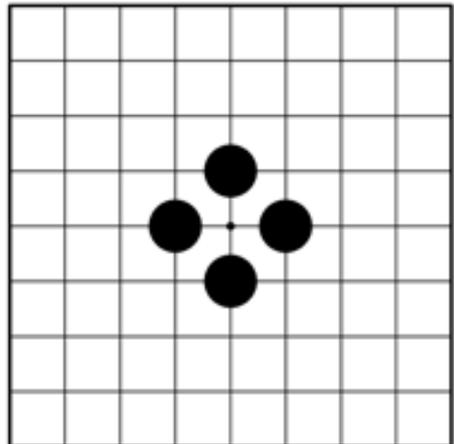
また6図の黒1のように相手の石を取ることを「ポン抜き」と呼びます。「ポンと相手の石を抜いてしまう」といった意味ですね。

注意していただきたいのは、ポン抜く側の石（6、7図の場合は黒石ですね）の位置関係です。白石に対し、4つの黒石がすべて密着していますよね。この状態なら白石を取ることができます。

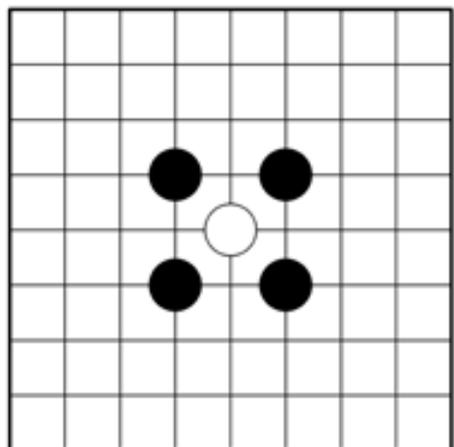
その一方で8図のような状態では、白石を取ることはできません。確かに四つの黒石で囲ってはいますが、白石に対してどの黒石も密着していませんよね。碁を覚えたてのうちはどちらも同じように見えてしまいがちですが、6、7図とは形が明らかに異なっているので、お間違いのないようにお願いします。



6図



7図



8図

次回予告

今回は「アゲハマを含めた地の数え方」についてお話しし、最後で「ポン抜き」についても少しだけ触れました。

次回はこの「ポン抜き」に関する様々なパターンを見ていくことにします。

また「取り方」だけでは片手落ちですから、逆の立場からの「逃げ方」についてのお話します。

すでにご理解いただいたように、囲碁とは「最終的に地の多い方が勝ち」というゲームですが、そこに至るまでの「取ったり取られたり」が面白さの要因であることは、やはり疑問の余地はありません。

これまでの2回分は地味な計算ばかりで少々退屈だったかもしれませんが、来月号からはいよいよ技術的な内容へと入って行くことになります。

どうぞお楽しみに。

指導者の方へ

先月号、そして今月号と、2回を費やして「地の計算」から話を始めさせていただきました。ずいぶん時間をかけて計算ばかりをさせると思われた方も多かったのではないのでしょうか。

しかし先月号でもお話したように、従来の「石の取り方=ポン抜き」から入門を始めると、どうしても後々「石取り→地」へと入門者の意識を切り替える必要が生じてしまいます。そしてこの切り替えに失敗すると、せっかく囲碁に興味を持ってくれた人に「やっぱり囲碁は難しい」という誤解を与えてしまうのです。私もそうしたケースをたくさん目撃してきました。

そこで、くどくて足が遅いようでも、最初に「地の概念」を理解してもらう手法を採用しました。

結局これが最もスムーズだと思えますし、碁が打てるようになってからも「石を取りたくて仕方がない病」にも罹りにくく「石を取られても最終的に

地が多ければいいのだ」という広い視野を持ちやすくなるので、上達も早いのではないかと思います。

そして来月号からは、いよいよ「石の取り方」をお話するのですが、今後の方針としては、これまでお話ししてきた「地の概念」はとりあえず脇に置いておき「石の取り方」に特化したお話をしようと思っています。

6月号と7月号で、石の取り方と逃げ方を含めた技術面を理解してもらい、残りの2回で「地の概念」と「石を取ったり取られたり」を融合させていくつもりです。

どう融合させていくかについてはなかなか難しいところですが、私の経験からすると「地の概念」さえしっかり理解できていれば、融合に関してはあまり苦勞せずクリアできてしまうものなんですよ。

ですから、これから入門者を指導される方には「まず地の概念をしっかりと教えてあげてください」とお願いしたいと思っています。